

# 漢方薬による腸間膜静脈硬化症

監修

福岡大学筑紫病院 消化器内科 教授 松井敏幸

JR大阪鉄道病院 消化器内科 部長 清水誠治

漢方薬の長期服用による腸間膜静脈硬化症については近年多くの報告がなされている。2013年に厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患克服研究事業)「腸管希少難病群の疫学、病態、診断、治療の相同性と相違性から見た包括的研究」班(研究代表者:日比紀文)による「腸間膜静脈硬化症」全国調査がなされ、このほど分析結果が報告された。本資料は分担研究報告書を基に情報を整理し、リーフレットとしてまとめた腸間膜静脈硬化症に関する最新情報であり、処方される先生方においては診療の参考とされたい。

## 疾患概念

腸間膜静脈硬化症(mesenteric phleboscrosis)は、大腸壁内から腸間膜の静脈に石灰化が生じ、静脈還流の障害によって、腸管の慢性虚血性変化をきたす疾患であり、静脈硬化性大腸炎(phlebosclerotic colitis)とも呼ばれる。近年サンシシを含有する漢方薬の長期服用が原因の一つとして注目されている。

## 原因

漢方薬、特にサンシシがその原因の一つとする多くの報告がなされている。サンシシ中のゲニポシドが大腸の腸内細菌によって加水分解され、生成されたゲニピンが大腸から吸収されて腸間膜静脈を通過して肝臓に到達する間に、アミノ酸やたんぱく質と反応し、青色色素を形成するとともに、腸間膜静脈壁の線維性肥厚・石灰化を引き起こし、血流を鬱滞させ、腸管壁の浮腫、線維化、石灰化、腸管狭窄を起こすと考えられている。漢方薬の服用歴のない症例もあり、その他の要因として、環境要因や遺伝的要因、合併疾患との関係性や免疫異常の関与など、様々な考察がなされているが、現在のところ漢方薬(サンシシ)以外に関連性が強く示唆される報告はない。

## 症状

主に腹痛(右側)、下痢、悪心・嘔吐が認められるが、無症状(便潜血陽性を含む)の症例もある。また、症状の重いものではイレウスを呈する場合もある。

## 診断 特徴的画像所見、組織学的所見から診断される。

- <大腸内視鏡> 右側結腸を中心とした粘膜の色調変化(暗紫色、青銅色など)、浮腫、血管透見消失、半月襞の腫大、伸展不良、管腔狭小、びらん・潰瘍など
- <注腸X線> ハウストラ消失、拇指圧痕像、管腔狭小化、辺縁の鋸歯状変化、硬化像、粘膜粗慥、バリウム斑など
- <単純X線/CT> 右側結腸を中心とした大腸壁あるいは腸間膜静脈に沿った線状、点状の石灰化
- <病理組織> 静脈壁の著明な線維性肥厚と石灰化、粘膜固有層の著明な膠原線維の血管周囲性沈着、粘膜下層の高度の線維化など

## 診断上の注意

手術例では病理組織所見が根拠となる。臨床的には特徴的な内視鏡所見と生検所見、あるいは内視鏡所見とCTによる腸管壁や腸間膜静脈の石灰化が確認できた場合に本症と診断されるのが通例である。